

① 「海外に行く価値観が変わる」という言葉を私は飽きるほど今まで聞いてきた。私はそんな話を聞くと頭のどこかで本当にそうなのか疑問を抱いていた。海外旅行を何回か経験したことがあったが、楽しかったという感覚があっても、価値観が変わるとまでは考えたことがなかったからだ。なぜ今まで自分が価値観の変化を感じていなかったのか。その答えは単純明快であった。海外に行くことに関して何も考えてなかったからである。

ディレクトフォースの方々や笹川平和財団の方々や日本財団の方々の話を聞いて色々と考えたことがあった。世界を又にかけて、活躍してきた方々で尚且つ、様々な経験談を交えたお話をさせていただき、その時のメモを見返すとどの方のお話にも共通点があった。「他国の文化に触れることで考え方が変わる」ということだ。私の長年の疑問がここで解明された。他国の文化に触れるだけではなく、それに加えて、もう一つ重要なことがある。他人の意見を聴き、それを受け入れる必要があるのだ。このことは日常生活でも大切になっているというのは周知の事実であるが、そのプロセスが信頼関係を築く上で重要な事柄となっている。自分が日本という国で培ってきた意見を基にして、謙虚に、柔軟に、意見を受け入れ、相手の意見のと差異を調整することでより自分も相手も深まっていくという考え方だ。どちらかの一方通行の考え方をしたところで話は深まらず、その場で話は切り捨てられてしまい、自分の中で変化するのは一切ないままになってしまう。また、人の話を聞くことによって、相手は自分の話を聞いてもらっていると考え、お互いに信頼関係を築き合うことも出来るのである。世界で活躍する中で、ついてまわるであろう、よりよい世界になるにはどうしたらよいかという問題に対して考えていくのに、様々な人の考え方に耳を傾け、より深く、視野の広い考えをしていくことが大切であると分かった。

しかし、この考え方だけでは私たち高校生は留学をしなければ価値観を変えることが出来ず、旅行程度の長さでは価値観の変化を感じることができないのではという意見もあるかもしれない。もちろん、ディレクトフォースの方々も笹川平和財団の方々も日本財団も方々の中で私たちに留学しろと強制してきた人は誰一人としていらっしやらなかった。では、どのようにして、価値観の変化を生み出すのか。

その問いに対する答えの鍵となる言葉がある。但木さんの話の中で出てきた「常識は常識でない」という言葉だ。私はこの言葉に強く心を打たれた。自分が思っている当たり前というものは海を越えてしまえば、当たり前ではない奇矯な習慣と捉えられなくもないのだ。むしろ、日本人の考える常識を一度振り払う必要性もあるかもしれない。私たちの思う当たり前との差異点というのは、写真などを見ただけでわかるような外見的なものだけでなく、実地に行ってみないと分からないことまである。自分が行った国の雰囲気に触れ、少しでも多く知ることでは自分は社会に生かされているという受身形の人間ではなく、自分は社会で生きなければならないという存在価値を自分で見つけようとする能動的な人間になることにも繋がるのである。他の国には日本と違う部分があるということに対して、面白さを抱くのはもちろんいいと思うが、面白さに上乘せして、先程の話に繋げるが、その違いを受け入れていくだけでも、価値観は少し変化するのではないかと考える。

今まで何回も「価値観」なんてカッコいい言葉を使ってきたが、元々価値観というのは物事を判断するときの根幹となる物事の見方であり、つまり、自分がある物事に対してどう考えるかということの尺度にあたるわけである。偏見を持たず、さらに考えなさすぎることなく、海外に目を向けるこ

と。それが高校生である私達に少しでも今から出来ることなのではないかと思う。

② 「僕は、アステラスのくすり。僕は、生まれてきました。まだ治せない病気を治すことを夢見て。」

私達の班は一日目の午後、アステラス製薬の方のお話を伺った。アステラス製薬では医療用医薬品、つまり、医者から私達患者に手渡される薬を作っているとの話だった。

薬というと「ジェネリック医薬品」という言葉を想像する人も多いと思う。私もそのうちの一人だった。しかし、アステラス製薬では新薬を生み出すということに力を入れているらしい。「ジェネリック医薬品というのは安定して供給出来るという確証がないからです。もしも、薬がなくなって困ってしまう患者さんが出てしまったら元も子もないのです。」この発言を聞いて私は強く納得したと同時に、薬を作る上で重要なことに触れた気がした。

アステラス製薬は研究、開発、生産、販売のサイクルによって薬を作るというビジネスが成り立っている。その各プロセスで役割があり、必要とされる理由がある。研究は薬の元となる物質を土壌などから発見したり、開発したりすることで、薬に秘められた可能性を助けることに繋がる。開発は薬の安全性を複数のフェーズに分けて確認することで、薬の有効性や副作用を確認し、既存薬との比較をし、薬に関する正確な情報を確認する。生産は医薬品の製造や品質の管理を行うことで品質の高い安定した安価な薬を大量に作る事が出来る。また、先程の話に繋がるが、特許が切れた薬であれ、安定した生産を行うことで、その薬を必要としている患者に安心して薬を使ってもらえるようにする。販売は MR による的確で細やかなインフォメーションを患者や医者に伝え、何かが起こったときも迅速に対応することで薬に対する信頼をさらに深めてもらう。このサイクルがあつてこそ、薬を生み出すということが成り立っている。しかし、薬を生み出すと一言で述べても、そんなに単純明快な道ではない。新薬は約 3 万もの可能性のなかから 1 つしかできず、その一つを作り出すのに短くて 9 年、長くて 17 年かかり、100 億円を超えるお金だつて必要となってくる。実際、アステラス製薬でも売上の 17% が研究開発費となっている。裏を返せば、そのくらい使わなければ新たな薬は出来ないのだ。

「そこにニーズがあるならば、そのために薬を創り出している。」

アステラス製薬は自分たちの得意としている分野をより伸ばし、がんやアルツハイマー病といった具体的な特効薬が未だ確立されていない病気、つまり治療満足度の低い病気に対しての薬の開発を行なっている。まだ完全ではないものに対して日々変化する医療の先端に立ち、日々進歩する科学の進歩を患者の価値に変えていく。薬を作っていくという仕事の上でそのことが重要なことのように感じた。そして、患者を助けている人間の一人になれた瞬間、薬が役に立ったと感じ、やりがいを感じ、そのことをバネにまた進んでいく。アステラス製薬は社会に価値を提供することで社会はアステラス製薬に存在の承認をする。そんなサイクルを繰り返すことにより、お互いに認め合った状態で社会に存在することが出来るのである。

Serendipity という言葉をアステラス製薬の方が教えてくださった。意味はふとした偶然をきっかけにひらめきを得て、幸運をつかみ取る能力のことだそうだ。手探りながらも薬を待つ患者のことを思い、真摯に打ち込んでいくアステラス製薬の方々がとても輝いて見えた。

私もいつか困っている人のために何かに対して挑み続けることのできるような人間になりたいと思った。